

脳性麻痺による脊椎性頸椎症を呈する事例に対し在宅での安全な移乗動作獲得を目指した一症例

～訪問リハビリの役割として～

株式会社アールケア

訪問看護ステーションママック

吉村 史郎

【はじめに】訪問リハビリを通し、本人に合わせた福祉用具作成による環境設定を行い度重なるベッドからの転落防止を図り安全な移乗動作獲得へ至ったケースに協力機会を得たのでここに報告する。

【事例紹介】65歳、女性、脳性麻痺、頸椎性脊椎症（四肢不全麻痺）、要介護4、FIM91点、夫と2人暮らし、移動は車椅子使用、

【経過】介入時、頻回にベッドからの転落が発生していた。その要因としてベッドと車椅子間の移乗は自力にて行えるが車椅子からベッドへ移り、端座位保持の状態から臀部を後方へプッシュアップでの移動時に上肢での支持性が弱いことが関係していた。転落回数2～4回/日であり夜間帯に多く発生していた。転落時は夫の介助を要していた。ベッドでの端座位時に足元側に把持する物が無いことが転落に繋がっている状況であったが、端座位保持から臥床時に両側下肢を持ち上げる際に妨げとなりベッド柵を設置することが出来なかった。他の福祉用具を検討するも本人に適応せず使用することが出来なかった。

【取り組み及び結果】本人の移乗動作に適合するように寸法、材質、コスト面、安全面を考慮して合板とパイプを用いて、ベッドへの設置可能な簡易手すりを自己作成することでベッドからの転落防止へ繋げるに至った。

【まとめ】本症例において既存の福祉用具では本人が安全に在宅生活を継続することは難しい状況であった。在宅生活支援における訪問リハビリの役割としてその方に合わせた環境設定を行うことであり必要性に応じた工夫も重要であると考えた。